

靴の歴史散歩 ⑦②

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

社団法人 東靴協会の前身、東京靴同業組合（1909年—1943年）が、創立25周年記念事業として刊行した『製靴読本』（昭和10年発行・非売品）（写真参照）も、当然のことながら西村記念室の書庫に収蔵されている。

明治32年（1899年）の『製靴図集』（「靴の歴史散歩」⑥⑧で紹介済み）も製靴読本ではあるが、どちらかといえば、アメリカの製靴事情、流行情報などが主体で、製靴技術の教本とはいいがたい。

昭和10年発行のこの本こそ、日本最初の本格的製靴読本といえるものである。これを機会に、その概略をご紹介したい。

まず『製靴読本』の〈目次〉でその内容をご覧いただきたい。

- 第一章 靴の起原
- 第二章 靴の性能
- 第三章 足の生理的考察
- 第四章 寸法の取り方
- 第五章 材料及び裁断
- 第六章 木型
- 第七章 紙型及び裁断法
- 第八章 製甲
- 第九章 底付
- 第十章 婦人靴 子供靴 運動靴

目次を列記すればこれだけのものだが、各章毎に作業手順に従っての詳記があるので、まさにプロ仕様の教科書である。

第九章の〈底付〉を例にとれば、①材料下拵え、②釣り込み、③すくい縫いか

ら底かぶせ、④出し縫い及びコバ決め、⑤積み上げ及び仕上げ、と図解もあって、丁寧この上ない。

底付けは、「手縫い靴」を基本にしているが、「機械製」「機械併用」も解説している。

1 全手工、2 機械製、3 半手工と分類し、半手工は機械と手工を混用して製作するも、工程によって第一種（俗に九分製）、第二種（俗に七分製）、第三種（俗に半製）と分類している。

「九分製」とは、細革を手工ですくい縫いし、若しくは細革をアリアンズで縫い通し、出し縫いを機械により、他は全部手工、若しくは機械によるもの。

「七分製」とは、手工によって細革をタックス止めとし、出し縫いを機械により、他の作業を手工若しくは機械によるもの、と定義付けている。

九分製、七分製の業界用語も、死語になって久しいだけに、なんとも懐しい響きである。

（この項続く）



昭和10年に東京靴同業組合が発行した「製靴読本」